

日文研は研究の心

クラティラカ・クマーラシンハ

傑出した研究活動を行ってきた国際日本文化研究センター（日文研）が三〇周年を迎える。これは祝うべき大きな出来事であり、ここにその祝辞を述べることは私の大きな喜びです。

誰もが知るように、研究は高等教育の文脈では一人でやり遂げることに重要な学術的探究と考えられています。したがって博士論文前と後の両方のレベルでなるべく多くの研究プロジェクトに参画することは、ほとんどすべての研究者にとって熱い希望であります。しかし経済的限定によりこの目的に達成できる者は多くありません。しかしこの点で私は日本へ行く奨学金を一つ、フェローシップを三つ獲得することができ、達成することができたのです。私は研究の成功をただ国際日本文化研究センターに返したい。その研究成果がどれほど重要であったかを述べなければ、私にも私の国にも恩義を果たさなかつたことになりかねないでしょう。

最初の奨学金で一九八五年から八七年まで大阪外国語大学へ留学し、能について研究することができました。二〇〇三年には東京の大東文化大学にて日本の民俗劇についての研究に専念する機会を得ました。二つの研究を終えたおかげで、シンハラ語で伝統的な日本演劇と日本の民族芸能について著作を著すことができました。その次の助成金は二〇一一年七月から二〇一二年四月にかけて九州の創価大学で得たもので、能に描かれた仏教について研究しました。しかし助成金の中で私が最も価値があったと思うのは日文研よりいただいたもので、ここは

研究室に夜まで居残って仕事を続けることができる滞在型の研究所なのです。その間、知識を深めることができました。この時のテーマはシンハラ演劇に対する日本伝統演劇の衝撃でした。荒木浩先生が受け入れ教員で、ふたつの演劇の登場人物の精査から行い、日文研のすばらしい条件のおかげで仕事を楽に進めることができました。最新設備、各国語の紙媒体や電子データを備えた図書館は静かな環境と相まって、最も進んだ研究に向いていました。これらのおかげで調査を進めることができ、私は最大限に満足することができました。

インフラもさることながら、日文研にはその他にもたくさんの特長があります。毎週のように開かれる研究会はその一つです。それは他の大学人や彼らの国の課題、関心、興味に関して広い知識を得るのに良い機会でしたし、木曜日に英語で開かれるセミナーはなかでもすばらしく、いくつもの発表を聞く機会を得ました。滞在中、私は二本の英語論文と一本の日本語論文を発表しました。ゆったりとしたコモンルームは多くの研究者がふらりと立ち寄り、研究やよしなしごとをコーヒーやお茶などを楽しみながらリラックスして話し合える場所でした。日文研の田園的な場所もこれらに彩を与えてくれる特徴です。ハウスの同宿者が朝夕、センター近くの丘あたりでトレーニングをするのは滞在中見慣れた風景でした。それらを今でも数え上げることができますし、懐かしくまた非常に幸せに感じます。三〇年間の献身的努力に対して心より祝福を述べたいと思います。

(シンハラ百科事典編集長・名誉教授)

原文…英語

翻訳…細川周平 (国際日本文化研究センター教授)